

そろそろ稲刈りが始まるというころ、私の手元にタイ王室から小包が届いた。開けてみると、丁寧にリボンをかけられたカボチャの種が十袋入っている。タイ語で書かれていたパッケージに、商品名だけが「Ohto」とローマ字で記されていた。大好きだった祖父の名字だ。おじいちゃんがカボチャの種になって私のところに帰ってきた!

祖父は八十五歳で現役を退くまで、東南アジアの農業振興にかかわる仕事を続けていた。その中でタイの皇女さまに日本の農業について進講する機会に恵まれ、農業について関心の高い皇女さまと意気投合したぞうだ。その後、祖父は皇女さまと年に一度、クリスマスカードを交換し合うようになった。

その祖父が八十九歳で大往生した時、母たちはいただいたお香典の一部をタイの皇女さまに寄付することを思いついた。日本ではそ

# 南阿蘇

吉田 愛梨

## 里の風



### カボチャになった祖父



絵・有働 孝昭

れほどの大金ではなくても、物価の安いタイなら何かの役に立ててもらえるかもしれないと考えたのである。

領事館を通じて皇女さまにその意向を伝えると、直接会って下さることになった。そこで一家を代

表して叔父と私が小切手を持ってタイに渡った。タイ王国の第二皇女であるシリントーン皇女は農業だけでなく、環境や福祉の問題にも明るい。私が有機農業をしていることを伝えるとたいへん喜び、両国の有機農業や環境の変化

について、小一時間ほどお話しすることができた。

寄付金については、「おじい様が喜ばれる使い道を考えておきます」と言ってくくださったので、安心して帰国した。その後の知らせによると寄付金は、タイ北部の食糧不足を改善するため、病害に強くて栄養価の高い新種のカボチャを研究開発する事業に充てられたということだった。

あれから二年の月日が流れた。当時始めたばかりだった農業にも少しは慣れ、タイで開発されている「カボチャ」のことは遠い記憶になりつつあった。そんな折、祖父の名前がついたカボチャの種が届いたのである。皇女さまの粋なはからいだ。この新種のカボチャがタイで栄養不足に悩む人々を一人でも多く救ってくれることを願ってやまない。春になったら私もそのカボチャを庭に植えよう。食事中に「ぼっくり逝った」祖父は、天国で喜んで味わってくれるだろう。

(おあしす米生産者、NPO九州バイオフォーラム理事長)